

8月6日(木)発行

当日の感動を
すぐお届け!!

ほぼ

日刊サマーミュージック

Hobo Nikkan Summer Muza

朝刊

情熱から確信へ～

大野和士と都響の見事なショスタコーヴィチ



8月5日(水) 東京都交響楽団 撮影：青柳聡

大野和士が指揮するショスタコーヴィチの「交響曲第5番」を実演で聴くのは、ザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団を率いて日本ツアーを行った1992年以来23年ぶりだった。オーケストラは今年4月から音楽監督を務める東京都交響楽団(都響)。23年前はクロアチア紛争のさなか、戦場のオーケストラと苦難の日々をともにする青年指揮者の真摯な情熱に胸打たれた。今回は大野自身の確信に満ちた円熟と日本のオーケストラ、特に都響の表現力の向上に目をみはった。

第1楽章の出だしから並外れた気合いがこもり、そのテンションは第4楽章の終わりまで50分間、一度も緩まなかった。本人の努力とは全く関係ない理不尽な権力に巻き込まれ、極限の状況に追い詰められてなお、希望を失わない人間のつよさ、素晴らしさを見つめるショスタコーヴィチの大きな眼差し。大野は「革命」礼賛、圧政告発のいずれにもくみせず、より大きな人間性への賛歌として、楽曲を克明に再現していく。

都響の弦はもともと5部(第1、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、

チェロ、コントラバス)のバランスがよく、スマートでクールな音色を持ち味とするが、ここ数年は厚みと艶が加わり、長く日本のオーケストラの弱点とされてきた「サウンドアイデンティティー(音響の個性)の乏しさ」を急激に克服しつつある。今回も第3楽章ラルゴの始まりで、背筋が(いい意味で)ゾクッとするほどの音色に触れた。とりわけ第2ヴァイオリンの雄弁さは特筆に価する。第2楽章でのソロ・コンサートマスター、四方恭子のソロもまた、皮肉よりはヒューマニズムに傾斜して、指

揮者との解釈の一致を印象づけた。

金管楽器、木管楽器、打楽器がそれぞれ高水準のソロ、アンサンブルを保つ中で、フルート首席奏者の柳原佑介のソロは一段と際立つ音楽性を発揮した。

前半にはプロコフィエフのバレエ音楽「シンデレラ」の組曲第1番が演奏され、1990年代後半からドイツ、ベルギー、フランスの劇場で重要な仕事を続けてきた指揮者による、舞台を彷彿とさせる棒さばきを楽しんだ。

音楽ジャーナリスト 池田卓夫

8/5 東京都交響楽団

お客様の声から♪

産休に入ったので普段はなかなか来れないクラシックコンサート。ショスタコ素晴らしかった。お腹のあかちゃんも激しく反応してびくびくっと動いてました。(35歳・看護師・ミミ) / 鳥肌が立った。表現の振り幅がすごい。(46歳・会社員・じい) / 都響サウンドが爆発した素晴らしい演奏でした。ミュージアのホールと都響の相性もとても良いと思います。(59歳・会社員・ADえいき) / 大野さんのタクトのもと一糸乱れぬ都響の演奏にブラボー! 今後もこのコンビにぞくぞくします。(50歳・会社員・新任支店長)

19歳の気鋭レビューー拓やん、サマーミュージックを往く!

作品の本質を抉り出す稀有な名演 東京都交響楽団



平岡拓也・大学生(19)

いよいよ始まった大野×都響の新時代。創立50周年を迎え、今秋には欧州楽旅も控える名門の凄みは、満場の聴衆を終始圧倒した。

公開リハから凄まじい緊張感がホールを包み、本番さながらの白熱した練習に期待が高まった。プロコフィエフのバレエ「シンデレラ」組曲は交錯する管弦楽の妙を精緻に再現、かつ

劇場人ならではの語り口で魅せる。後半のショスタコーヴィチ第5番では、今や有名曲となったこの作品が内に秘めた狂気を引き出すような熱演が繰り広げられた。そのままライブ収録しても遜色ないほどに高められた圧倒的なオケの機能性と、暴力的な強奏から沈痛な哀歌まで振れ幅大きく引き出した指揮者の手腕が、ピタリと合致した演奏に、喝采は止まなかった。

平岡さんのブログ「たくさん聴かな、あかんやん。」 <http://maestroinbal.blog.jp/>

